

## がんと共存する時代・・・

日本人のがん死亡率は、30年前に脳卒中を越して1位です。そして、年間66万人が罹患し、34万人の方（全死亡数の1/3）が亡くなっています。がん医療費は副作用のケアなどを含めると年間15兆円になり全医療費（37兆円）の3分の1に当たります。

1971年、ニクソン大統領はアポロ計画に似せて巨額の研究費を投じて‘がん撲滅’を目指しましたが失敗しました。マクガバン委員会は、これまでの見方を変えて調査した。ガンや心臓病などは‘食源病’であり、穀物中心の食事にして、肉や卵・乳製品・砂糖・塩を減らす必要があると報告した。業界からの猛攻撃を受けました。しかし、‘90年には上下両議員40名からなる米議会技術評価局（OTAレポート）が報告したのはもっと衝撃的でした。抗がん剤は腫瘍を縮小するが5～8ヶ月で再燃する。多剤投与では命に関わる副作用が7～10倍になり、生存期間が短く、治療をしない方が長生きするなど通常の三大療法（手術・抗がん剤・放射線療）の限界を認め、非通常療法（unconventional cancer treatments）による自然治癒力で克服する食事、行動・心理、薬草、サプリメント、免疫療法の有用性を推奨したのです。



このように、がん治療の変化の中で丸山ワクチンが見直されてきました。

120年前にW.コーリー（米）は末期の骨肉腫が丹毒の発熱で治ったことに目を付け弱毒化したColey toxinを治療として使いました。これががん免疫療法のはじまりでした。そして、‘69年にはJ.マテ（仏）やD.モートン（米）が白血病や悪性黒色腫にBCGを使って効果をあげました。しかし、その3年前の‘66にわが国の丸山千里がヒト結核菌抽出物質（丸山ワクチン）を初めてがん患者23名に使用し13例に有効であることを報告しています。

ヒトの細胞は60兆個あります。毎日1%の6000億個が入れ替わり、約6000個の細胞ががん化しているのです。しかし、自然免疫細胞によってどんどん潰つぶされているために癌に成らない。この免疫学的監視説が認められるのは‘70年代になってからです。さらに、免疫系において大事な働きである、がん細胞を認識・攻撃命令を出す樹状（じゅじょう）細胞がスタインマンにより発見されたのは’73です。彼は膀胱ガンに侵されてガンワクチンを受けながら昨年死後ノーベル賞を受けました。

こうしてがんと免疫が未解決であった‘60年代に、丸山ワクチンはがんの延命効果を出したことは如何に先駆的な発見であったかと言うことです。副作用が無く、数多くの成績を上げながら未だ保険適応がなく‘有償治療薬‘としか供することが出来ませんが、1万円弱/40日と安価です。一方、保健適応の分子標的抗がん剤は自己負担だけでも20万円/月は掛かります。

がんは免疫力低下や代謝障害など老化によるものと考えられています。これまでのようにガンを叩き潰す治療からガンとの共存が考えられているのです。